

# これぞ南京大虐殺！

## 証拠の写真

中國側研究者・日本人留学生らの連携調査で確認

今年3月、社会部遊軍記者とし

て内勤だった私は、たまたま大阪市内の主婦 A子さん(65)から社

会部にかかってきた電話をとった。

「戦争中のむごたららしい写真があ

るんですが、処分に困ってるんで

す」。A子さん宅を訪れる、父B

さん(91)が、戦争中、満州(現在

の中国東北地方)で手に入れたと

いう、変色して黄ばみ、一部がボロボロになつた写真三十二枚が張つてある写真帳を手渡された。

Bさんの話によると、当時、大阪市内でキヤバレーなどを手広く経営していたが、「大陸にも店を出そう」と南京大虐殺事件翌年の1938年(昭和13年)4月に、親類の男性と一緒に新京(現・長春)に下見に出かけ、街角で若い中国人

日本人留学生らが「証拠の写真」の地域と確認した場所

人から入手した、という。

写真の中には、生首が並べられ

たのや兵士が幼児を刀で突き刺し

ているものなど、これまでにも見

たことのあるものも含まれていた。

「処分して」との父子の要請でアル

バムを持ち帰った。

社の調査審議室で調べたがよく

わからなかつた。4年前、同業他

社が「これが旧日本軍の毒ガス作

戦の写真」として報道したもの、

すぐに別作戦の煙幕の写真で、大

阪毎日新聞社のカーマラン、山上

円太郎氏(故人)が撮影したものと

わかる「誤報事件」があったばかり。

何人かの専門家に相談したところ

江口教授から「愛知大学の江口

圭教授・日本近・現代史専攻)に

相談してみたら」とアドバイスさ

れた。連絡を取り、アルバムを送

つた。

江口教授から「写真の鑑定は極

めて困難」としながらも「ちょっと

気になるのが一枚ある。拡大複写

して何枚か送つてもらえば、知

人の中国人研究者などに問い合わせてみる」とのこと。さつそく送

つたところ江口教授は、中国側の

高興祖・南京大副教授▽楊正元・

南京大虐殺記念館館長▽上海の復

旦大学と南京の南京大学に留学中の日本人学生▽日本側の南京大虐

殺研究家の藤原彰・元一橋大教授

(日本近・現代政治史専攻)▽洞富

雄・元早大教授(日本近・現代史

専攻)らに手配して下さつた。

高副教授からすぐ「川は揚子江で、対岸の山並みは十里長山、浦口のフェリーの棧橋。従つて場所は明らかに南京だ」と回答があつた。さらに、南京大に留学中の日本人学生(29)が、休日を利用して同じ日本人留学生と一緒にで南京市内を自転車で走り回つて調べた。

中国では軍事上の理由で写真撮影には神経質だが、コンパクトカメ

ラで、揚子江のあちこちを撮つて、

いるうち、同市下関地区的「南京

長江大橋」(全長6,772メートル)

東詰め南側のコンクリート堤防上から

対岸を見て「びっくりした」という。

「山並みがピタリ一致するんです。

この場所に自分がいることになんともいえない感動を感じた」と留

学生。

藤原彰・元一橋大教授は、「南京

大虐殺に関する様々な写真をこれ

までにも見てきたが、この写真は

初めてだ。日本と中国の研究者が

協力して撮影ポイントまで断定

したことには感心するばかりだ。研究

者にとってたどりよう貴重な写真」と話している。

写真は米春・小学校(本社・東

京から発行される「大系日本の歴

史第十四巻 二つの大戦デモク

ラシーヒアシズム」に収録され

るが、江口教授は「南京大虐殺の

写真といわれるものは多いが、場

所が南京と特定できるのは意外と

少ない。当時の惨状をほうふつと

させる一級の写真で、後世に残したいと思って収録することにした」と語つてゐる。